

『開設50周年セミナー』

テーマ:日本語はどのような言語か —内から見た日本語, 外から見た日本語

2016年9月3日(土)

場所:国立オリンピック記念青少年総合センター カルチャー棟 小ホール

(小田急線 参宮橋駅徒歩約7分) 要事前申込

13:00-16:25

影山 太郎(国立国語研究所)

複合語の小宇宙から日本語文法の大宇宙を探る

ホイットマン・ジョン(コーネル大学/使用言語:日本語)

日本語とその類型論的親戚

高見 健一(学習院大学)

「話し手」考慮の重要性と日本語

—「～ている」と「～てある」表現を中心に—

16:40-18:10 記念講演

林 望(作家/国文学者)

日本語の形と音と意味をめぐって—書物と文字と文学の現場から

18:30-20:30

●レセプション 場所:国際交流棟 レセプションホール

## 東京言語研究所 開設50周年記念シンポジウム

「日本語はどのような言語か—内から見た日本語、 外から見た日本語」概要

影山太郎氏

「複合語の小宇宙から日本語文法の大宇宙を探る」

複合動詞を大別すると、「降り始める」のように前部が動詞連用形であるものと、「旅立つ」のように前部が名詞であるものに分かれるが、前者が生産的であるのに対して後者はほとんど生産性がない。2種類の複合動詞に見られるこの非対称性を、述語領域と名詞領域における膠着度の非対称性（たとえば、「食べない」では「食べ」と「ない」が不可分に密着しているのに、「魚を」では名詞と格助詞が形態的に密着していない）と関連づけることにより、膠着型言語としての日本語全体の本質が見えてくる。

John Whitman 氏

「日本語とその類型論的親戚」

最近の研究では、世界の言語の中では日本語はけっして類型論論的に珍しい言語ではないことが明らかになってきた。たとえば角田(2009)では、日本語の特徴とよくされる語順、使役構文、「人魚構文」などは日本語以外の言語でも観察されることが指摘されている。本発表では、World Atlas of Linguistics Structures (Dryer and Haspelmath 2009)の統計論的分析(Whitman and Ono 2016)により、複数の観点から「日本語の言語類型論的親戚」を抽出し、その特徴を考察することによって日本語の「特殊性」を解明する。

高見健一氏

「話し手」考慮の重要性と日本語—「～ている」と「～である」表現を中心に—

最初に、「ね・よ・ぞ・わ」等の終助詞、「～てくる／～てくれる／～てもらう」等の表現、被害受身文、敬語等を概観し、日本語は、話し手の心的態度が言語表現に現れやすいことを示す。次に、「～ている」表現の動作継続・結果継続の解釈の違いは、話し手が発話の時点で何を観察できるか、「～である」表現の適格性は、話し手が当該事象の行為者であるか観察者であるか、を考慮する必要があることを示し、日本語研究において「話し手」が重要な役割を果たすことを指摘したい。

●記念講演 林望氏

「日本語の形と音と意味をめぐって—書物と文字と文学の現場から」

私どもは、なんの意識もなく母語日本語を使って、読み、書き、理解している。しかし、文学を創作し伝承し、またそれを研究するという立場からすると、実はこの文字の形や音や意味を巡って、幾多の問題が存在するのである。たとえば、古典作品は写本・刊本として伝存してきたのだが、一つの写本を作るという営為のなかに、どれほど複雑な問題が内在するか、また近代の詩などを例にとってみても、そのTEXTを正確に理解し玩味するために、たった一文字、あるいは「空格」にすら大きな「意味」があることを知らなくてはならぬ。本講演は、実際の作品の読解や書写を例示しながら、日本語を読み書きするということがいかに複雑な営為であるかを論述したい。